

## 千葉先生を送る

岩 山 太次郎

文学部英文学科助教授の千葉哲郎先生は定年を迎えられ、1999年3月末日をもって同志社大学をご退職になった。千葉先生が英文学科の助手に就任されたのは1961年4月であったから、ご在任期間は実に38年に及ぶことになる。この間、同志社大学在外研究員として、1963年8月から1年間ウイコンシン大学で（フルブライト留学生として）、1977年8月から2年間、同じくウイコンシン大学で、1985年4月から1年間アーモスト大学で、さらに1995年3月から半年間オックスフォード大学で研究を積まれた。同志社大学に規定がないため名誉職の称号を贈れないのは残念なことであるが、先生の長年にわたる教育研究に心からの敬意を表したい。

いま千葉先生を送るにあたって、ご業績、同志社大学とりわけ英文学科へのご貢献を改めて思いおこしてみれば、1954年5月以来の知己である私は、語らなければならないことが沢山ある。ときには波調が合いにくいと私には思えたあのユニークな個性に触れなければならないだろう。あのユニークな個性がなければ千葉先生は千葉先生でなくなってしまう。千葉先生たる所以はそこにあるのだが、凡人には波調が合いにくいと思えるあのユニークさは芸術家が秘めている殺気とも言えるものである。ある同僚はこのユニークな個性を「深く、原点へ」と向う姿勢、そして「それを貫くためには妥協されない、その頑固さ」と表現し、それを「千葉先生だけが醸し出される諧謔」ととらえ、親しんだと言う。これ以上にあのユニークな個性を語ることは難しい。

また、新島襄に人間としての、教育者としての理想像をもとめた千葉先生の情熱も語らねばならないだろう。田畑忍に求めた彼の世界平和主義も語らねばならないだろう。イーハブ・ハッサンの「パラクリティシズム」（千葉先生はこれを「反批評」とか「周辺批評」と呼んでいる）を教室で講じられたことも言及したい。エジプト政府が科学振興のためアメリカへ送ったにもかかわらず、文学に転向し、すぐれた文学論を展開しているあのハッサンとのかかわりである。私も長年の知己でもあるので、ハッサンの主張はすばらしい知見と思うが、「パラクリティシズム」だけは私の理解をはるかに越えている。ボルヘスに倣ってかどうか知らないが、現代から時代を遡って説かれた「アメリカ文学史」の講義のこと、1981年の「京都アメリカ研究夏期セミナー」の講師として招いたウイスコンシン大学ウォルター・B・ガイドロート教授への熱の入れようも語ってみたい。

しかし、これらすべてを語っても千葉先生のご業績を顕彰できるとはかぎらない。顕彰にもっとも相応しいのは、先生の教育の、研究の原点を語ることであろう。そうならば当然、ウィリアム・フォークナーとのことになる。

千葉先生のフォークナー研究への心血の注ぎようは並みのものではない。フォークナーの宗教性（「宗教性」なんって言うものではないとお叱りをうけるかもしれないが）を軸に千葉文学研究土俵は広がり、A・ギンズバーグやJ・C・オーツへ、そして狭い国というような概念を越えて、古代ギリシア悲劇の世界から現代ヨーロッパの、さらには日本の文学（特に丹羽文雄や大江健三郎）といった人間存在の原点を問う文学へと広がっている。

この軸であるフォークナーへの千葉先生の態度を私は格闘と呼びたい。格闘であるから真剣勝負である。それも神的存在との真剣勝負である。フォークナーを読むこと、考えること、語ることは神的存在の愛に接することであり、畏敬のもっとも相応しい表現形式なのである。

千葉先生がいつから神的存在たるフォークナーに憑りつかれたのか私は知らない。修士論文は“Doomed Bondage in William Faulkner”（1961年3月）

であるから、それより以前であることは間違いないし、『寓話』に「救い難い人類の救いを祈る切なる作家の叫び」を聞かれたのは、これを読み終えた大学3年のある深夜だということだから（「W・フォークナーさんをしのんで」（1962年7月8日付）（*L.L.L.*, No.48（1962年8月25日発刊）），1953年以前からフォークナーとの格闘が始まっていることになる。

千葉先生のフォークナーへの畏敬がもっとも深く表現されているのは、論文「フォークナー文学にみる文明像——特にフレム・スノープス系列の人物たちにみられる“vision of evil”の展開をめぐる——」（『同志社アメリカ研究』4号（1967年11月））である。見事な論文で、フォークナーを現代アメリカ文学にとどまらず、世界文学のなかに位置づけ、先生のフォークナー理解を十分に論じておられる。『館』のフレム・スノープスを通して、フォークナーが描いたのは文明を生み出したのは人間であるが、人間は同時に「自らを破滅に導く存在でもある」ということであり、『館』は「人間の罪に対する裁きを予言する」警告の書、と先生は読んでおられる。この論文の結びはこうである。「フォークナーにとっては、人類を悪霊の手にかかった破滅から救うためには、人類に、失われつつある愛、憐憫、同情、希望、等々の過去の美德を思い起こさせながら、自らの深い罪と愚劣を思い知らせること以外になかった。」「そこに、彼の芸術の始めがあり、終りがある。」まさにその通りであろう。フォークナーが「スノープス三部作」で描くのはこれに違いないと思う。しかし私のような、フォークナーの死の報に接したとき、「ああ、助かった。これでもうあの難渋な文章は増えない」と思った不埒な人間には、そこまで信仰的理解に達せられなくて、作品の表面的な瑣末なことに振りまわされてしまう。ミンクのフレム殺害行為は恨みを晴らす復讐とだけ取ってしまいそうになる。「個人の人間性の剥奪と抹殺の危機の象徴的表現であって、どのようにしてこの危機から人類を救うか、ということに彼〔フォークナー〕の心血は注がれた。フォークナーは、1925年に構想し、手始めた一連の作品の中で、特に、このような人間の危機を、彼の倫理を通して劇的に描

き出したのであった」とは、なかなか読みとれないのである。千葉先生の理解は正しいと思う、しかしそのためにはフォークナーの「誇張とデフォルメーション」が分かるほどまでフォークナーを読み込まなければならないのだろう。

「ウィリアム・フォークナーと丹羽文雄における宿業の世界（Ⅰ）」（『同志社大学英語英文学研究』3号（1972年3月））も読みごたえのある論文である。『アブサロム、アブサロム！』全9章の順を追っての分析は詳細で緻密である。ジム・ボンドの怒号の解釈も明快である。ジムの正しい位置づけなくしてはクエンティンの言う「ぼくは南部を憎んじやないよ」という言葉の真意は理解できないだろう。ミス・ローザやコンプソンからの話やコンプソンを通してのクエンティンの祖父コンプソン将軍とサトペンのことなどから、またクエンティンとシュリーヴとの対話だけからでは、南部の苦悩する荒廃はわかって、も、「青年の新たな苦難の旅への暗示」までは読みとれないのである。『アブサロム、アブサロム！』に「業苦の実在的克服を望見する」作品とする結語の意味は深い。

千葉先生にはフォークナーを論じておられる論文は他にもあるし、学会での発表もフォークナーに関するものが7回ある。（日本アメリカ文学学会全国大会で4回、日本アメリカ文学学会関西支部例会で1回、アメリカ学会年次大会で2回）。したがってフォークナーに関しては私は先生の説を拝聴するだけであるが、ただひとつだけ先生を羨ましがらせることがある。それは私はフォークナーと握手をした経験があるということである。（ひょっとすると、千葉先生のことだからフォークナーとも握手されたことがあるかもしれないが、「握手と人柄」（*L.L.L.*, No.58（1968年2月25日））というエッセイではW・H・オーデンとの握手は書いておられるが、フォークナーとのことは言及がないから、私は自慢することにする。）1955年8月の終りか9月初めのことである。「長野セミナー」のあとでの京都での講演会後のレセプションである。（講演会は現在のウイングス京都の場所にあった京都アメリカ文化セン

ターの2階で、レセプションは京都駅前の今の関西電力のビルの食堂であった。)千葉先生流に書こうとすれば、私はここでフォークナーの人柄にふれなければならないが、講演の内容については何の記憶もない。記憶がないというよりは実は分らなかったというのが本当のところだろう。質疑応答のときにどなたかが何か難しい質問をされたら、フォークナーが“I'm a farmer. I don't know it.”とぶっきらぼうに答えたことだけは憶えている。まだ大学院に入りたてであったにもかかわらず、厚かましくもレセプションにまで出かけ、フォークナーに関する当時なけなしの知識を絞って、S・アンダソンとの関係や受けられた影響を尋ねてみた。返事は“Not much.”のひとことでおしまい。多分、私の英語が通じなかったのだろう。だから人柄など言えたものではない。ただただ大作家と握手させてもらえただけで光栄の至りであった。しかしそのためか、フォークナー文学とのかかわりは今に至るも並のままである。だから私にとっては千葉先生のフォークナーとの格闘は貴重であり、その研究を顕彰したいのである。

千葉先生のフォークナー文学への熱情はますます深みを増しているにちがいない。フォークナー土俵もますます広く、重厚になっているに違いない。健康に留意され、これからもフォークナーを語っていただくことを願っている。